

## シリーズ 植物標本庫から

## 植物標本をどう活かす？：長野県版レッドリスト（維管束植物）改訂での活用

「シリーズ植物標本庫から」の第3回は、植物標本がどのように活用されるのかを、長野県版レッドリスト（維管束植物）改訂（H25年度3月公開、以下RL）を例にしてご説明します。

RLの作成には、まず種が絶滅の危機に瀕しているか、そうでないのかを評価するために、種の最新の生育状況（分布、絶滅の危険性等）を明らかにします。野外観察に加え、文献、植物標本等から生育記録を収集し、生育状況を調査します。その上で、生育地が少ない種や、生育状況が過去と比べて悪化した種などを対象に、リスト掲載の可否やランク変更の妥当性を検討します。

例えばマメダオシ（ヒルガオ科、右図）は、県内の生育記録が1960年以降なく、長野県版レッドデータブックでは「絶滅」とされていました。しかし、植物標本庫の調査により、2007年に採集された本種の県内産標本を見いだしました。そのため、今回の改訂で「絶滅」から「絶滅危惧ⅠA類」にランクを変更しま

した。ですが、もし生育記録が写真や文献によるものであれば、ランクの変更はできなかったかもしれません。なぜなら、マメダオシは近縁種との区別点が微細で、写真から両種を区別することが難しいからです。一方、標本であれば微細な区別点でも、顕微鏡で詳細に観察することができます。

このように、写真や文献に比べ、標本は植物が確実に生育していた記録として信頼性が高く、より正確なRLを作成するうえで欠かせない資料となります。

（横井 力）



マメダオシの標本

## 読書案内

## 「異常気象と人類の選択」

江守 正多 著

（角川新書、2013年、215ページ、800円＋税）

これまで温暖化に関する本をたくさん読みましたが、本書ほど、温暖化と温暖化問題について「簡潔に、客観的に、わかりやすく」書かれた本はありません。

前半では、IPCC第5次評価報告書の執筆者であり、温暖化懐疑論にも正面から向き合ってきた著者らしく、温暖化の実態と懐疑論への回答をコンパクトにまとめている、これまで温暖化の本を読んだことがない人にとっては最良の入門書となっています。

後半は、温暖化問題を一步引いた立場で科学者として見つめてきた著者の経験から、環境重視か経済重視かという温暖化問題の論争を、「リスク選択」のフレーミングの違いとして捉え直すという、新しい視点を提案してくれています。常に議論が平行線をたどってきたこれまでの温暖化論争に、少々行き詰まりを感じている人にとっては、もう一度考え直すきっかけを提示してくれています。（紹介者 浜田 崇）

